映画時評

２０１９年の回顧

藤田明　映画評論家

２０１９年を振り返ってみたい。その手がかりは私の場合、伊勢新聞連載「シネマ近見」であるため、（１）にその自注を置き、（２）でベスト５など、（３）には四日市で見ることのできた２例を添えよう。

（１）新聞連載「シネマ近見」自注

『ガンジスに還る』（１月２０日付）

インド映画。舞台のバラナシはベナレス。大江健三郎や遠藤周作のベナレスとは違うが、アジア的な死生観の展開は何よりだった。

津村秀夫の映画評（２月３日、１７日付）

中・高生のころ、戦後すぐだが、『南部の人』『旅路の果て』『裸の町』をベスト１に投じていた筆名Ｑの映画評に魅せられ、私は見た映画についてノート７冊分、記し続けた。高３の途中で病になって休学。その頃から距離をとり始めていく。小津ネット季刊のレター連載の中で、それと関連。

２０１８年の外国映画（３月３付）

①『馬を放つ』②『ガンジスに還る』③『モアナ』④『軍中楽園』⑤『苦い銭』次点『長江 愛の詩』（そのほか『マルクス・エンゲルス』にも触れている）。

２０１８年の日本映画（３月１７日付）

①沖縄スパイ戦史②ニッポン国ｖｓ泉南石綿村③菊とギロチン④夜明け前 呉秀三と無垢の精神障害・・・⑤獄友、次点『万引き家族』（ほかに『カメラを止めるな』にも言及）。

阪本順治の『半世界』（４月７日付）

因と果のドラマでなく、突然に物事が起きる主義は興をひく。南伊勢町ロケが多いのに方言なしという点は評価も分かれよう。県内での上映は進富座だけか、文化的遅れの一例。

メキシコ映画『ROMA／ローマ』（４月２１日付）

１０年に１本と言える傑作。家庭劇でもあり社会劇でもあった。ネットフリックスとイオンの契約ゆえ、津で見られたが、チラシはないし、客も数人。気になった。

『偉大なるアンバーソン家の人々』（５月５日付）

ＲＫＯのマークに始まるオーソン・ウエルズの８８分版。前にテレビで見ているが、ＤＶＤによる今回は改めて堪能。４５分もカットされたと関係本で知ったが、完成度の高い

『市民ケーン』とは違う魅力もある。サドゥール本に記述された女優のアグネス・ムアヘッド、やはり心憎い。

ヨーロッパの2作品（5月19日付）

記録映画『ヒトラーｖｓピカソ』でゲーリングの美術趣味を知る。ナチに協力した画商、しなかった画商についても。独の『未来を乗り換えた男』は非リアリズム演劇的。秀作『東ベルリンから来た女』のペッツォルトだが、期待外れ。

2つのドイツ映画（6月30日付）

『僕たちは希望という名の電車に乗った』は旧東独を徹底批判した形だが、西側公式主義の立場で後味が悪い。対して『希望の灯り』は旧東独地域の今日。コンビニの裏で働く名もない男への暖かい目。小津映画の細部を思わす積み重ねは、まるでブラームスの室内楽の味だった。

中国映画『芳華』ほか（7月14日付）

歌舞団で、いじめに遭うヒロイン。文革を経た後、今日の国内的矛盾にも目を向けたスケールのあるメロドラマながら後味がいい。めずらしく津へ来た大作なのに客はまばら。シネコンは留学生や県内で働く中国人労働者などへＰＲが眼中にだろう。「ほか」は松阪での小津の展示を紹介。

この夏の催しなど（8月25日付）

４つについて記した。多度で伊藤有紀による地域のなつかしい写真展。津で森達也のトークとテレビ作品『放送禁止歌』。金子安雄の小型映画に関心のあるイエール大学に留学中の院生のこと。9月の彼岸花映画祭に来津する香川京子関連本も。

出会えた東西の映画人（9月29日付）

会えて話せた3例。サドゥール（時実象平さんからの速達で上京）。クレール（清水晶さんのおかげ）万博時でその夜のディトリヒのコンサートのことも。呉胎弓（最初は、上海撮影所で、再見時は引退後に会長をつとめる上海文化協会の大きな応接室で）。

映画関連の展示2つ（10月27日付）

東京国立近美の高畑勲展、最終日で超満員だった。映画雑誌展は国立映画アーカイブズ（旧フイルムセンター）。戦前の地方発行の例もいくつか。拙稿の末尾には「シネマ游人」もいつかその対象になるのかも、と添えた。しかるべき先には献本をお忘れなく。

イギリスと中国の力作（11月24日付）

Ｍ・リー『ピータールー マンチェスターの悲劇』はエイゼンシュテインのオデッサの階段のような部分がクライマ

ックス。民衆弾圧の史実再現ドラマ。J・ジャンクー『帰れない二人』の作風は、当局の禁圧下に生まれた独自の話材、スタイルだと思う。そこから伝統的な無常感も匂う。

活弁士をめぐる2例（12月29日付）

11月25日の飯高オーヅ会は澤登翠の語る『生れてはみたけれど』。地元の2つの小学校全員が参加。反応はいちじるしかった（午前には私の代理トークもあったが）。12月公開の『カツベン！』は、やや期待外れ。

イタリアの新作、日活の旧作（1月26日付）

年末、名演小劇場へ駆けつけた。伊の記録映画『水と砂糖のように』、秀作だった。そして『朝霧』についても。

―以上だが、7月から掲載は月一回になった。取り上げたかった『新聞記者』。中澤千磨夫の小津本3冊目と西松優「ハナ肇を追いかけて」も紹介したかった類。後者はよく調べあげた点がいい。山田洋次評価は山田に批判的な白井佳夫、四方田犬彦などへの対決姿勢を要するのでは。

（2）私のベスト5など

日本映画は別ページに示した以外を挙げるなら，④『陸軍前橋飛行場』⑤『カツベン！』未見の『i新聞記者』が気になる。外国映画は①『ROMA／ローマ』②『希望の灯り』③『水と砂糖のように』④『帰れない二人』⑤『芳華』⑥『家族を想うとき』⑦『ピータールー マンチェスターの悲劇』…⑩『ヒトラーｖｓピカソ』。次点『ＣＯＬＤ ＷＡＲ』。

（3）四日市で見られた2本

『陸軍前橋飛行場』は10月26日、四日市市総合会館で、市人権センターの主催。群馬県に戦中作られた飛行場についての聞き取り集で、今やっておかなくては、というのが動機（三重出身の監督の誰か、明野は勿論、香良洲や鈴鹿の例を撮る人はいないのか、と思う）。キネ旬文化映画ベストテン選者で5人が投じている。

『朝霧』は20年1月18日、市博物館で超満員。四日市再生「公害市民塾」の企画。日活68年の作だが、おクラ入りし、71年に大都市の一部で上映。県内では今回が初上映らしい。ロマンポルノ移行直前の滞貨一掃だったとか。福井が舞台ながら杉良太郎の医師が塩浜への転勤を希望。四日市の映像は僅かだが力作で吉田憲二監督ならでは。助監督の加藤彰（学童疎開で私は一緒だった）はこのあと監督に昇進。吉田は日活を去り、この後作品は少ない。再映を願いたい。

私的な素敵なシネマ２０１９

井上静夫　同人誌主宰

平成が終わり、令和が始まりを告げた２０１９年。映画の世界に目を転じると、平成の時代には３Ｄから４ＤＸにまで進化し、ハリウッド映画が全世界を席巻する時代になったといえる。そして映画はますます均一的になってきたような気がする。ファストフードのように映画もまたファスト化してきたのではないだろうか。全国に広がっているシネマコンプレックスはその象徴ともいえそうだ。

では、令和の時代はどのように変化していくのだろう。そのヒントのひとつにネットがある。今後は従来のような劇場公開の方法を取らず、ネットで公開する方式が増えていくのではないだろうか。すでに現在、ネット上の映画公開として、例えばネットフリックスなどがある。

そうなると、もしかすると人気中心の均一化した映画製作ではなくなり、筆者の好きなミニシアター系作品のように、多様性ある作品へとシフトしていくことも期待できるのかもしれない。映画は映画館で観る筆者としては複雑な思いがするのだが……。

前置きはこれくらいにして、いつものとおり筆者が２０１９年に観た映画を総括するとともに、私的なお気に入り作品についてご案内してみようと思う。

〈洋画〉

①『セメントの記憶』(ジアード・クルスーム　レバノン・シリア・独・アラブ首長国連邦)

②『ROMA／ローマ』(アルフォンソ・キュアロン　メキシコ)

③『山／モンテ』(アミール・ナデリ　伊・独・米)

④『バーニング劇場版』(イ・チャンドン　韓国)

⑤『サタンタンゴ』(タル・ベーラ　ハンガリー・独・スイス)

⑥『聖なる泉の少女』(ザザ・ハルヴァシ　ジョージア)

⑦『ホフマニアダ　ホフマンの物語』(スタニフラフ・ソコロフ　ロシア)

⑧『ザ・プレイス　運命の交差点』(パオロ・ジェノヴェーゼ　伊)

⑨『第三婦人と髪飾り』(アッシュ・メイフェア　ベトナム)

⑩『存在のない子供たち』(ナディーン・ラバキー　レバノン・仏)

〈邦画〉

①『あなたはわたしじゃない』(七里圭)

②『ひかりの歌』(杉田協士)

③『僕の帰る場所』(藤本明緒)

④『タロウのバカ』(大森立嗣)

⑤『よこがお』(深田晃司)

(注)　カッコ内は監督名と制作国(洋画のみ)

洋画ではこのほか『象は静かに座っている』『鉄道運転士の花束』『ジュリアン』『ナポリの隣人』『帰れない二人』『読まれなかった小説』『ディリリとパリの時間旅行』『天才たちの頭の中　世界を面白くする１０７のヒント』『少女は夜明けに夢をみる』などがあげられる。

邦画でもこのほか『ひとよ』『ある船頭の話』『典座―TENZO―』『春画と日本人』『僕はイエス様が嫌い』『漸、』『柴公園』『赤い雪　RED SNOW』などがあげられる。

洋画のラインナップを見てみると、ドキュメンタリーあり、アニメーションあり、そして何より年間を通して大豊作の１年だった。それも、筆者の偏愛するアート性の高い作品がてんこ盛りで、思わず小さくガッツポーズをするほどだった。なかなかの垂涎ものの１年だったといえる。今改めてその偏愛する映画たちを反芻し、悦びに浸っている。

これらの作品は、制作国についても多岐に渡り、メキシコ、ハンガリー、ジョージア、ベトナム……そしてレバノンに至っては２本も入っている状況にある。ただ、例年に

比べ、実力派監督の作品が比較的少なかった傾向もみられた。これは新しい才能が台頭してきたことにも通じていて、喜ばしいことでもある。

洋画が隆盛だった反面、邦画にはやや不満が残る結果となった。マイナーな作品で好みの突出したものがあったり、ドキュメンタリー作品が頑張ったりしたが、全体的にお気に入り度は高くなく、アニメーションにも見るべきものがなかった。世の中的には『天気の子』が大ヒットしたり、『映画　すみっコぐらし　とびだす絵本とひみつのコ』が予想外に当たったりしたが、大人の鑑賞に耐えるような、あるいは筆者の好みに合致するようなアニメーションが見られなかったのが少し淋しい。

個々の作品に移ろう。洋画は筆者のお気に入りとなる偏愛度の高い作品がズラリと並び、うれしい悲鳴をあげる中、まず『セメントの記憶』をあげたい。長い内戦にあったベイルートの超高層ビルの建設現場という、ドキュメンタリー映画の題材としてはめずらしいものを選んで、戦争(＝破壊)と建設(＝創造)を詩的に映し出し、アート性の高い作品に仕立てている。残酷なまでに衝撃的な映像も美しく切り取り、男たちの悲しげでやるせない表情が、セメントの味＝死の味に見えてくる。深く静かに訴えかける作品だった。

静かに語りかけてくる映画としては『聖なる泉の少女』も忘れてはならない。美しい自然の風景をバックに、冷たい泉に足を浸すような清冽、静謐な美しい映画だった。

こうした静のアートとは反対に動のアートとして『山／モンテ』があった。険しくそびえたつ山の岩壁を、憑りつかれたようにハンマーで打ち続ける姿がセピアトーンの映像で力強く迫って来て、圧倒される。

さらに圧倒されるのが『サタンタンゴ』。何しろ7時間18分、１５０カットの壮大な物語。ハンガリーの歴史を背景に、深い映像と緊張感で延々と綴ってゆく。どのシーンも美しいが、ひたすら歩くシーンが印象的だった。

そういえば、長尺の作品に好みのものが多かった年でもあった。２３４分の『象は静かに座っている』、１８９分の『読まれなかった小説』、１４８分の『バーニング劇場版』。それぞれ独特の魅力にあふれていた。とはいえ、全編を見届けるには体力が要る。映画観るのも体力なのだ。

『第三婦人と髪飾り』も自然光のやわらかさに支えられ、繊細で、息遣いまでが伝わってくる空気感があった。１９世紀のベトナムの闇がひりひりして、哀しくなるのを美しい映像で抑制的に表現している。

美しい映像は実写だけに限らない。『ホフマニアダ　ホフ

マンの物語』は、クオリティの高い大人の人形アニメーションであり、ファンタジーとオペラの世界が美しく、うっとりするほどだった。

巧みな映画作りとして、『ROMA／ローマ』『バーニング劇場版』そして『ザ・プレイス　運命の交差点』があった。『ROMA／ローマ』は、制作・監督・脚本・撮影・編集を一人で行ったとは思えない力作で、カメラワークが冴えていた。『バーニング劇場版』は、TV放映版とは少し異なっていた。原作(村上春樹)の空気を損なわず、それを凌ぐほど作り込まれていて、そのうえ、洗練された映像と観る人によって解釈が異なるよう巧みに仕掛けが施され、観客に考えさせる作品になっていた。『ザ・プレイス　運命の交差点』は、ほぼワンシチュエーションドラマで、重層的な構成がおもしろく、かつ効果的だった。

『存在のない子供たち』は、これらの作品とは異なり、観る人の心にナイフが突き刺さる作品である。主人公の少年に、生きろ、とにかく生きろ！　と叫びたくなるほどズシンとくる映画だった。

そのほか『天才たちの頭の中　世界を面白くする１０７のヒント』を始めとして、『ヨーゼフ・ボイスは挑発する』『草間彌生∞INFINITY』『アートのお値段』……と、現代アートを取り上げた作品にも興味を抱いた。

邦画はまず、多くの方にはなじみの薄い『あなたはわたしじゃない』に注目したい。これは通常の映画と違って、この作家独特の映像詩といえる作品である。内容は、少女と母の物語……といっても心象風景的な映像と少女のモノローグ、それに音響で表現しているだけである。白日夢を見ているような、詩的な、アート心をくすぐられる作品であるが、ただ好みの分れる作品でもあった。

『ひかりの歌』は多くを語らず、観客の想像力で観る映画になっている。繊細な作品で、映像にも凝っている。それを支えているのが、演技とは思えないほど自然な演技であった。

映画の作風は異なるものの、やはり自然な演技を採用しているのが『僕の帰る場所』だ。どこまでが演技なのかわからないほど限りなくドキュメンタリー的で、リアルすぎる日常が臨場感を増幅する。ミャンマー一家の家族のありようを描いていて、観ていて切なく息苦しくなってくる。

リアルな日常、それも当たり前のものとして暮らしている日常がいかにもろく崩れやすいかを暴き出すように撮っているのが『よこがお』である。この作家特有の描き方だ。加えて俳優たちの表現力が際立っていて演技合戦の様相を

呈しているのも見どころである。
映画作りにおいて、これらとは基本的に異なり、勢いのある作品として『タロウのバカ』があげられる。若者３人の熱量・エネルギーがハンパなく放出され、暗黒青春譚ともいえる社会への叫びが切なく暴走する。観ている者のこめかみに銃口を突きつけるような(実際、そんなシーンもある)作品には力が感じられた。
そのほか、ドキュメンタリー映画のうち、『春画と日本人』はあいちトリエンナーレ２０１９の不自由展騒動と通じるものがあり、興味を惹起する作品だった。
本稿は基本的にその年に名古屋で劇場初公開される映画を対象にしているので、それ以外の作品は本来対象外にしているが、ここにあげた作品と関連するということで今回は特別にフィルムフェスティバル等で上映された作品を紹介する。洋画では、『サタンタンゴ』のタル・ベーラつながりの作品『時間の木』(アンドレ・ギル・マタ)、邦画では、『あなたはわたしじゃない』の七里圭つながりで『ホッテントットエプロン＝スケッチ＝』(七里圭)、２年前に紹介した大力拓哉・三浦崇志の新作『金太と銀次』の３作品が、いずれもそれぞれ特異なものを感じさせ、惹かれた。
以上が２０１９年の映画である。改めてラインナップを一覧していただくとお分かりいただけるように今回も例年以上に偏向した作品の数々になった。本稿はいわゆる年間ベストテンとは異なり、優れた作品ばかりを取り上げるわけではない。私的なお気に入り作品ゆえの結果である。
２０２０年がどんな年になり、どんな映画が観られるのかわからないが、素敵な作品に巡り合って、またみなさんにご案内できることを願っている。